

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書」

京都大学文学研究科博士後期課程 1 回生 蒲 知代

今回の派遣プログラムでは、ハイデルベルク大学とストラスブール大学の二つの大学を訪問し、現地の学生と交流することが最大の目的であり、かつ最大の成果であった。ハイデルベルク大学で最初に交流したのは、キエフ出身で言語学を専攻している男子学生と中国出身でメディア学に関心をもっている男子学生であったが、自己紹介のあと、私が名前のスペルを教えてほしいと頼むと、笑顔でノートにサインをしてくれた。ハイデルベルク大学の学生と交流するというのだから、知り合うのはドイツ人だと思い込んでいた私は、最初は少し戸惑ってしまったが、昼食に向かう道中、中国出身の男子学生と英語でコミュニケーションを交わすうちに、彼がハイデルベルクに来てまだ半年であることを知り、とても親近感が湧いた。また、昼食のあとに話しかけてくれた男性はドイツ出身の Ph. D.で、ナショナル・ミュージック、とりわけギリシアとトルコの音楽を研究しているようで、ハイデルベルクにはもう十年以上も住んでいることをドイツ語で話してくれた。そして、ストラスブール大学で出会った男子学生は、とても流暢な日本語で、彼の研究テーマである日本の妖怪について熱く話してくれた。さらに、学生ではなく先生だが、ストラスブール大学の施設を案内していただいた Sandra Schaal 先生は、私がフランス語を勉強して一年だとフランス語で言うと、ゆっくりとしたフランス語で「あなたは何を研究しているの?」と優しく聞いてくださったのも、大変嬉しかった。このように、今回の研修で使用した言語は英語・ドイツ語・日本語・フランス語の四ヶ国語であり、外国語を学ぶことが異文化交流においていかに大切なことであるかを実際に知ることができた。また、多様な言語を習得することによって、自分の専門(ドイツ語学ドイツ文学)の垣根を越えた学際的な異文化交流が可能になることを実感することができたという意味でも、今回の研修でドイツとフランスの二つの国を訪問できたことは大変有難かったと思う。

さて、今回のプログラムの中でとりわけ興味深かったのは、ハイデルベルク大学のアジア・ヨーロッパ研究クラスター *Cluster of Asia and Europe* を見学し、クラスターの仕組みとそこで実施されている教育内容について説明していただく機会を得たことであった。説明会は全て英語で行われたが、それは全く不思議なことではなく、クラスターで行われる授業が基本的に英語で行われるからであった。

説明会の冒頭では、このクラスターがドイツ政府の資金援助を得て 2007 年から始められた新しいプロジェクトであるということが強調された。そこからは、研究が資金のうえに成り立っていることに対する強い意識と感謝の念を感じ取った。また、説明会の中盤では「学際的な *interdisciplinary*」という言葉が繰り返されたが、クラスターが存在する意義もそこに集約される。というのも、クラスターで行われている研究プロジェクトは、統治と行政 *Governance & Administration*、公共圏 *Public Spheres*、知識システム *Knowledge Systems*、歴史性と文化遺産 *Historicities & Heritage* の四つの研究領域に分けられており、さらに仏教学 *Buddhist Studies*、文化経済史 *Cultural Economic History*、グローバル美術史 *Global Art History*、思想史 *Intellectual History*、映像・メディア人類学 *Visual and Media Anthropology* の五つの教授職の設置によって、「異文化(アジアとヨーロッパ)間の *transcultural*」研究が可能となっているからである。そして、研究プロジェクトの成果は専門書やジャーナルの形をとって随時公表されている。

また説明会の後半では、クラスターが若手研究者の育成のために提供している修士課程 *Master Transcultural Studies (MATS)* と博士後期課程 *Graduate Programme for Transcultural Studies (GPTS)* の教育プログラムに関して、引率のビヨン＝オーレ・カム先生から説明を受けることができた。MATS と GPTS の学生は、日本の学生と同じように授業を受け、*Reading Class* や *Cluster Colloquium* で発表・議論を行い、指導教官の指導を受ける。ただ、日本の大学との大きな違いは、クラスターという特殊な教育環境に学生が置かれることによって、「学際的な」かつ「異文化間の」研究が行い易くなっていることであり、これがクラスターにおける教育の長所であることは言うまでもない。(もちろん、日本の大学でも同様の仕組みが行われている場合もあるが。)

以上のように、今回の研修では海外で行われている先駆的な教育プログラムの一つを勉強させていただくことができた。私は半年後に交換留学生としてオーストリアのウィーン大学に留学することが決まっているが、今回の派遣プログラムでの経験を通して、できればドイツの大学でも少し学んでみたいとも思った。また将来、研究職に就いて大学の教員として働くことを目指しているため、今回の研修で学んだことを出発点として、海外と日本を結ぶグローバルな大学教育に貢献できる人材になりたいと考えた。

最後に、このような貴重な経験を享受する機会を与えてくださった、引率のカム先生、コーディネーターの平田昌司先生、指導教官の松村朋彦先生、支援室の向井さんと倉田さんに感謝の言葉を申し上げたい。また、今回のプログラム参加を通して知り合うことができた同じ文学部のメンバーにも、皆で協力して楽しい研修になったことを感謝したい。